

1P128

治療薬の自己中断により入院を繰り返したBasedow病の12歳女子例

寺田 啓輝^{1,2}、杉山 千央^{1,2}、高橋 智子^{1,2}、
森内 優子^{1,2}、根岸 潤¹、瀧上 達夫^{1,2}、森岡 一朗²¹イムス富士見総合病院²日本大学医学部付属板橋病院

【背景】

Basedow病はびまん性の甲状腺腫大、頻脈、眼球突出が3大徴候であるが、思春期前では落ち着きのなさや学業成績の低下など非特異的で多彩な精神的症状を有することがあり、見過ごされるケースもある。今回、治療薬の自己中断により入院を繰り返したBasedow病の12歳女子例を経験したので報告する。

【症例】

12歳女子。母親が眼瞼浮腫と甲状腺腫大に気づき、近医を受診したところ、血液検査で甲状腺中毒所見を認め当院に紹介となった。初診時に頻脈、高血圧があり、超音波検査で甲状腺は腫大し血流増加を認めており、Basedow病として内服治療を開始した。甲状腺機能が軽快したため、患児と母親に服薬の重要性を説明した上で退院した。退院5日後の外来で、血液検査により甲状腺中毒所見を認め、感冒契機の増悪と考え再入院した。内服を增量し甲状腺機能が軽快したため退院した。退院7日後の外来で、血液検査により再度甲状腺中毒所見を認め、短期間での増悪を繰り返していることから怠薬が疑われ再入院した。患児や母親に家庭での服薬状況を確認したところ、母親の監視下で内服していたが、時折母親が目を離した際に薬を捨てていたことが判明した。そこで患児と母親個別に家庭での状況や怠薬理由を聴取した。その結果、患児は、入院しているときは母親が優しく甘えることができるという考えを持っている一方、母親は、患児が中学生だから自分で管理できるようになってほしいという考えを持っていることが判明した。そこで、患児から母親へ強く怒らずに見守ってほしいことを伝え、服薬時間に母親が面会に来て時間を共有するなど患児の精神的安定を図った。さらに、服薬の重要性を患児と両親へ再度説明した。以降、怠薬や甲状腺機能の増悪なく、定期外来に通院中である。

【考察】

既報では、怠薬理由として副作用の不安、服用の煩わしさ、生活環境の変化などが要因として挙げられている。また、中学生で両親から自己管理に移行することが多いが判断基準までは明確にされていない。本症例では、母親が落ち着きのなさや学業成績低下などを甲状腺中毒症状と気付かずに注意していたことが患児のトラウマとなっていた。入院することで母親が優しく自分に注目してくれるという患児の気持ちが、治療薬の自己中断による複数回の入院に至った主因で、いわゆるミュンヒハウゼン症候群と考えられた。

1P129

小児慢性疾患患者のヘルスリテラシーの実態

小澤 典子¹、平賀 紀子²、古谷 佳由里³¹筑波大学²茨城県立子ども病院³埼玉県立大学

【背景】

小児慢性疾患患者の多くが成人期を迎えるようになり、成人期への橋渡しを行う移行期支援が注目されている。中でも重要な支援の一つが子どもの自立支援である。自立支援は「良い健康を維持、増進するために情報へアクセスし、理解し、活用する動機づけと能力を決定する認知的社会的スキル」であるヘルスリテラシー（以下、HL）に見合った関わりや、HLの獲得を促進する関わりが必要とされる。そこで、支援方策の一助を得るために小児慢性疾患患者のHLの実態を調査した。

【方法】

2020年9月～同年12月に、A県内2施設で、小児科外来に通院する中学生以上の慢性疾患患者59名を対象とした無記名自記式質問紙調査を行った。HLの把握にはHLS-14を用いた。これは、基本的な読み書き能力を指す帰納的HL、情報を入手・伝達・適用する能力を指す伝達的HL、情報を批判的に吟味する能力を指す批判的HLから構成される。5段階リッカート方式で回答し、得点が高い程HLが高い。分析は、記述統計、関連する属性の検討のために差の検定および相関分析を行った。有意水準は5%とした。本研究は、研究者の所属施設、調査施設の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】

対象者の疾患は、糖尿病が16名、血液・腫瘍疾患が4名、循環器疾患が39名であった。平均年齢は15.6±2.6歳（11-22歳）で、男性が44.1%であった。HLの合計平均得点は10.1±1.8点（7.0-14.4点）であった。下位尺度では、機能的HLの平均得点が4.2±0.8点（1.4-5.0点）、伝達的HLの平均得点が2.8±0.9点（1.0-5.0点）、批判的HLの平均得点が3.2±0.9点（1.0-5.0点）であり、機能的HLと批判的HLの平均得点（ $r=0.721$ ）に関連がみられた。伝達的HLと他の下位尺度には有意な相関はみられなかった。

【考察】

HLの中でも、伝達的HLが低かった。これは小児慢性疾患患者の移行期支援において指摘されている、保護者や医療者に依存的な医療が反映されている結果だと考えられた。また、たとえ機能的HL等が獲得されたとしても、伝達的HLが獲得につながるわけではないことが考えられ、自立支援において、患者自身が医療者や周囲の人に意見を伝えられる機会を設け、得た情報を理解し、生活に取り入れていく過程を支援していくことの重要性が示唆された。